

旅を終えて

1555年、アルメイダが豊後府内に初めて足跡を残した年、蔣洲という明人が大友宗麟の謁を求めました。彼は明国の正式の使者である「大明副使」でした。何をしに来たかという当時猖獗を極めた倭寇の海賊行為を取り締まることを要求してきたのです。明の正使が五島、松浦（長崎県松浦市）、博多を経由して、九州の覇者ということで豊後に大友氏を訪ねてきたのですから、当時の大友宗麟の名前が、中国大陸にも聞こえていたということです。現に彼は1年余りも府内に滞在しながら対馬の宗氏や山口の山内氏に、暗に大友氏の

威光を示しながら倭寇の禁圧を求めた文章を送っています。蔣洲から見た1555年当時の宗麟は、単なる戦国大名ではなく、少なくとも西国探題のような実力者に見えていたのでしょうか。それにしても大明国の正使が一年以上も滞在したということは、大明国の大使館がこの府内（現在の大分市）に開設されていたことになります。当時の大友氏の国際的な地位がどんなものか、この事だけでも証明されるのではないのでしょうか。

ところで問題は、蔣洲が日本に派遣された理由です。要は「お前のところの海賊を何とかしてくれ」ということでした。唐代の遣唐使から明代の足利氏による朱印船貿易まで、



中国側（被害者側）から見た、当時の日本人海賊（倭寇）の姿

日本と大陸の間はそれぞれの政府公認の交易がおこなわれていたのですが、日本が戦国時代に突入して、強力な中央政権が無くなると、九州の西北岸地域の大小名による私貿易だけが交易ルートとなり、私貿易であるために次第に暴力化して海賊いわゆる倭寇になって行ったのでしょうか。明王朝が倭寇に手を焼いていたことは有名な話であり、やがては明国滅亡の一要因にもなったほどです。

倭寇がやっていたであろう海賊行為は物品の略奪だけではなく、働き手や女性を拉致して、別の場所で奴隷として売り飛ばすことも含まれていました。そこで思い出されるのが、地中海でのサラセン人による海賊行為です。やっていたことは倭寇もサラセン人もほとんど同じです。いささか違うのはサラセン人と地中海北岸のキリスト教国の間には宗教という争いの種があったことでしょうか。



大分駅北口広場で出迎えてくれるドン・フランシスコ大友宗麟と聖フランシスコ・ザビエル

当時の世界で、極東での東シナ海を挟んでの倭寇と明国、西方の地中海を挟んでのサラセン人とキリスト教国、いずれの場合も正面切って大会戦でもやっけて一時に決着をつけるというのなら、明国やキリスト教国の方が勝ったでしょう。それが地中海ではキリスト者たちは身代金を集めては、サラセン人に囚われている同胞を開放することしかできないでいましたし、明国もまた大友宗麟に「何とかしてくれ」と訴えに使者を派遣することぐらいしかできなかったのです。ゲリラやテロが怖いということは、昔も今も変わらないということでしょうか。

折角、バスコ・ダ・ガマたちが苦勞して切り開いた喜望峰回りのインド航路も「それならば」と今のソマリアやイエメン沖で待ち伏せる海賊たちによって、航行を脅かされるようになっていました。日本にまでやってきていたポルトガル船が、まるでハリネズミのように武装していたのも、実は海賊対策でもあったというわけです。



当時の地中海で最も恐れられていた海賊のボス、赤ひげ（バルバロッサ）兄弟の弟の肖像



近代兵器で武装する現代の海賊たち。彼らの活動の中心は地中海からソマリア沖に移っている。中世から近世までの地中海の海賊と同じように、宗教的主張の影に隠れて、貧困と国際社会のパワーゲームに振り回されて、経済成長ができない社会構造が見え隠れしている。

21世紀の今日に舞い戻って、世界を見渡せば、地中海周辺の地ではギリシア問題、I Sによるテロの激化、アフリカ北部からの大量違法移民の流入問題などがあり、極東の地では海を挟んで北朝鮮による外交と呼ぶのもはばかれる瀬戸際外交があり、中国による東シナ海、南シナ海での自儘な海洋進出問題など、わたしたち人類にとって、これまでの数百年の時の流れが何だったのでしょいか。わたしは地球の裏側まで行って現代の南蛮の

風に吹かれて、この中世日本で南蛮文化が花開いた地に帰ってきたその日から、わたしはかえって、歴史が繰り返す目を覆うばかりの現実に腕を組んで考え込まされています。